

弓、静止の武術。そこに秘められた深淵すぎる歴史と身体操法の秘密とは？

月刊 秘伝

武道・武術の秘伝に迫る

THE HIDDEN
BUDO & BUJUTSU

弓道

― 伝統と革新

特集
武器の力を妨げず、
最大限に発揮する
“心身”とは!?

2012 NOV.

2012年10月14日発行・発売
(毎月14日1回発行・発売) 通巻299号

- ◎ 他武道の応用から見出された、真の合理射法とは?…… 啓進会
- ◎ 世界弓術選手権大会、世界に挑んだ和弓の真実
…… 細井英彦(日本選手団監督)・宮田純治(和弓選手)・松尾牧則
- ◎ 弓道新時代への挑戦…… 宮田純治
- ◎ 和弓における照準と、角見の働き…… 松尾牧則
- ◎ 求道の弓と弓道要前…… 弓道正法流・紫鳳会二門

● GRAPHICAL PHOTOS

フィリピン・カリの実戦的護身テクニック

長沼敬憲新連載開始! 腸脳力を磨く! 現代兵糧食のススめ

第57回日本泳法大会 古流泳法が魅せる水上の伝統技能

特集

弓道 — 伝統と革新

武器の力を妨げず、最大限に発揮する“心身”とは!?

- 他武道の応用から見出された、真の合理射法とは?……啓進会
- 求道の弓と弓道要前……弓道正法流・紫鳳会一門
- 世界弓術選手権大会“世界に挑んだ和弓”の真実
……細井英彦(日本選手団監督)・宮田純治(和弓選手)・松尾牧則
- 弓道新時代への挑戦……宮田純治
- 和弓における照準と“角見の働き”……松尾牧則

———— 8

加藤伊三男館長(柳生新陰流 春風館道場)を日野晃師範が訪ねた! 現代に体现される古流の本質。

士(サムライ)のスピードとは? ————— 38

世界が認めた武器と素手のコラボレーション

フィリピン・カリの実戦的護身テクニック ————— 50

阿吽会

人間を根本から強くする稽古法 ————— 58

茂呂恵子 武姫塾「推手・練功」セミナー

強くなるって、本当は物凄く簡単なことなのかもしれない ————— 70

安藤毎夫×三枝龍生

養神館合気道の“習い方” ————— 78

倉部誠 「なぜそうするのか」まで提示する欧米式指導法でチャレンジ!

「三戦」を試す ————— 84

第57回日本泳法大会

古流泳法が魅せる水上の伝統技能 ————— 86

中国と日本。本当は繋がっている! 今春実施の「日中国交正常化40周年記念大会」レポート

日本武道団、少林寺を訪ねる! ————— 94

功朗法 門同流兵法 柔術セミナー

“護身と制圧の相違点”合理的技術探求 ————— 106

DSで解く!

高岡英夫の“人類遺産” ————— 64

多田容子 “柳生新陰流が現代コミュニケーションに役立つ!?”

武術に学ぶ会話術 ————— 76

武術と格闘技をつなぐ私的考察

平直行の現代武陵桃源記 ————— 92

山口香

現代柔道へ“活” ————— 98

松原秀樹

100%動き切るための調整術 ————— 100

毛利元貞

上達する“コツ”させる“コツ” ————— 114

● 平上信行「武術秘伝書夢世界」 ————— 112

● 黒田鉄山「直間直答!鉄山に訊け」 ————— 120

● 天野敏「組手、ときどき波」 ————— 122

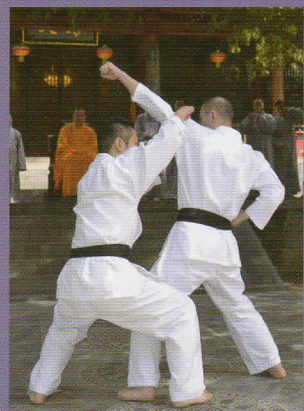
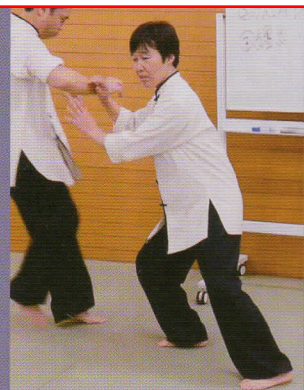
● 日野晃「武道者徒歩記」 ————— 124

◎ 秘伝ジャーナル ————— 127

[今月の表紙]

弓道界にあって極めて革新的な研究を突き進めるグループ、啓進会。特筆すべきは、他の武術の理を取り入れ、応用しているという点。写真の守屋氏は“独学ですから”としながらも、剣さばきはかなりのレベル! 弓道だけ他とは違っているように感じていた方は多いはず。しかし同じ人間の為す所業、そんなはずはない。すべては確かな“理”のもとに繋がっているのだ!

※お詫び『七帝柔道記』は今月は都合により休載致します。



特集第三章

細井英彦(日本選手団監督)・宮田純治(和弓選手)・松尾牧則

鼎談・1967第24回世界弓術選手権大会

“世界に挑んだ和弓”の真実

かつて、和弓がアーチェリーの世界大会に挑んだという歴史的事実が存在する。

1967年7月、オランダ・アメルスフォールトで開催された第24回世界弓術選手権大会、ここに全日本弓道連盟が派遣した代表選手の一人、宮田純治氏は自ら工夫をこらした和弓をもって、並み居る世界強豪たちと渡り合った。その後の日本弓道の方向性に多大な影響を与えたであろう、この事実について、国際武道大学体育学部准教授である松尾牧則氏が、

日本選手団監督・細井英彦、和弓選手・宮田純治の両氏に当時の模様をお聞きした。

資料協力◎細井英彦、宮田純治、その他 取材・構成◎増井浩一、本誌編集部

弓道の中のアーチェリー

大会前日に行われた現地での合同練習で、アーチェリーに混じって練習をする宮田氏。

——本日はお忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。本日は、当時、全日本弓道連盟(以下「全弓連」)が加盟していた国際アーチェリー連盟主催による、1967年に行われた第24回世界弓術選手権大会について、当時の日本代表選手団の監督を務められました細井英彦先生と、同大会に最初で最後の和弓選手として参加された宮田純治先生を迎え、国際武道大学の松尾牧則先生には司会進行役として当時のお話などをお聞きいただければと思います。よろしくお願い申し上げます。

松尾 私はい前から、宮田先生が和弓

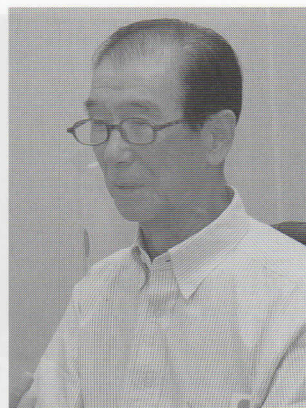
を持つて世界大会に出られたことをお聞きしており、実際どのようなものだったのだろうと関心を持っていたのですが、なかなか当時の情報を得ることはできないままでした。いつか直接お話を聞きしてみたいと思っていたのですが、このたび御縁のできた「秘伝」編集部がこの話をしましたところ、急遽この場をセッティングさせていただくこととなった次第です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

まずは細井先生から簡単に弓道歴とアーチェリー歴をお願いいたします。

細井 私は旧制中学1年生のときに、愛知県名古屋市内に住んでいたんですね。名古屋というところは全国的にも武道が盛んで、剣道、柔道が学校の正課に



なっておりまして。私は両方とも取ったんですが、弓道は正課にはなかったんですね。そこで「どうせやるなら3つ共やろう」と、部活動に弓道部を選んだんです。それが13歳のときでしたね。現在、私は84歳でございます（笑）。松尾 まだまだお元気でいらつしやるところは、さすが武道家ですね。細井 アーチェリーを始めたのは大学に入ってからです。中学生のときに第二次世界大戦がありましたから、中学3年生で軍需工場へ行き、14歳になったときには繰り上げ卒業になりました（本来は5年制・17歳卒業）。戦争が終わってもしばらくは弓を引く機会がなかったんですが、1949年に上京、早稲田大学へ入学すると洋弓部という看板を見つけたんです。その看板を頼りに道場へ行き、入部しましたが、部員が引いているのは和弓でした。戦後、GHQによって武道が禁止され

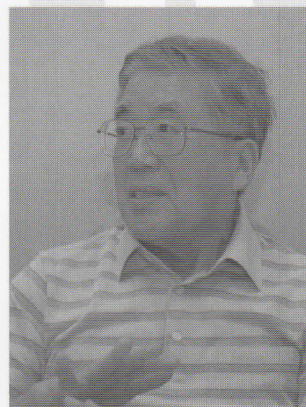


細井英彦

HOSOI Hidehiko

1928年4月4日、愛知県名古屋市生まれ。旧制中学校1年生で剣道・柔道を授業、弓道を部活動に始める。旧制中学校卒業後、名古屋薬学専門学校（現・名古屋私立大学）入学。第二次世界大戦終戦と同時に自主退学し、早稲田大学入学。同大学卒業後はいったん名古屋市へ戻るも、1962年から要請を受けて早稲田大学体育教科実技講師を務める。一方で早稲田高等学院アーチェリー部監督、定年後に早稲田実業高校弓道部監督を続け今日に至る。本文中にもあるように、世界弓術（アーチェリー）選手権大会日本選手団監督を務める等、戦前、戦後を通じて日本の弓道、アーチェリー界双方の発展に大きく貢献した実績が光る。

ていたから、表向き洋弓部という名前で和弓をやっていたんです。でも「洋弓部という看板を掲げているからにはアーチェリーを知らないわけにはいかないだろう」ということでアーチェリーを探しまして、そこに私がアーチェリーを始めるきっかけができたわけです。大学にはすでにアーチェリーをやっている人がいて、研究もしていたんでしよう、和弓を短く切つてアーチェリーのようにしてやつている人もいました。その後、大学を卒業してからは就職のために名古屋へ帰っていたんですが、1962年に早稲田大学から弓道の授業を受け持つほしいという話をいただき、再び上京しました。このときに東京に出てから今日まで、弓道もアーチェリーも両方続けております。松尾 その頃のアーチェリーは、竹製だったんですね。



宮田純治

MIYATA Junji

1938年1月27日生まれ。0歳のときに一家揃って上海に渡り、第二次世界大戦終結前年の1944年に帰国。中央区立泰明小学校卒業後、私立芝中学校入学。中学生時代の1951年にはアマチュア将棋の名人戦東京代表となる。1959年に弓道の日置流印西派に21歳で入門。1965年に大東文化大学入学、1970年卒業。1973年、カーボンやグラスファイバーを主材とする和弓製作会社「ミヤタ総業株式会社」を設立、今日に至る。将棋では数々の大会に優勝し、プロ入りすればA級は確実と言われ（しかし奨励会には入らず）、弓道では日置流に入門した年にいきなり東京国体選手になり、大学在学中の1967年には第24回世界弓術選手権大会に和弓で出場する等、将棋、弓道共に天才肌として知られた存在である。

細井 まだ本格的なアーチェリーは輸入されていなかった時代ですから、竹の弓だったと思います。松尾 日本の古いアーチェリーをときどき見かけますが、最初に見たときにその材質が竹でできていることにびっくりしました。細井 ただ当時は海外のアーチェリーも、1本の木の棒で作られるストレートボウでした。松尾 ありがとうございます。次に宮田先生の弓道歴をお願いいたします。宮田 私が初めて弓を手にしたのは子供の頃でした。海岸でね、距離が10メートルあるかないかのところに風船をぶら下げて弓で射て遊んでいたんですが、それで弓を覚えたんです。実は母が学生時代に学校で弓道をやっていたらしくて、その影響もあったんですね。本格的に和弓を始めたのは1959年、私が21歳のときで、縁があつて日置流

世界大会出場へ向けて

松尾 ありがとうございます。では、いよいよ第24回世界弓術選手権大会に話題を移したいと思います。細井 最初に全弓連がFITA（旧・国際アーチェリー連盟／現・世界アーチェリー連盟W.A.）に加盟したんですね。東京オリンピック（1964年開催）からアーチェリーが正式種目となる予定だから、そのためにまず世界選手権に日本代表選手を送ってほしい、ということになったんですね。結局、この時のオリンピックでは採用が

本誌、好評連載が待望の書籍化!

佐川幸義宗範の教えを受けた
二人の書簡問答

合気を使うための 「体の術理」と 「愛の原理」(仮)



合気に至る極意論
+
技術解説(写真)

日本武術の真髄、 “合気”への確かなる道標!

無理な力を使わずに相手を制する合気の神秘に迫る本書では、不世出の達人と称される大東流合気柔術・佐川幸義宗範の薫陶を受けた両者が、実際の武技を示しながら意見を交わしていく。求める一つの境地に向かって、対照的な個性でそれぞれにアプローチしてきた二人だからこそ、その化学反応によって真理が明らかにされる。

CONTENTS (予定)

序 章◎プロローグ編

第1章◎合気あげ

第2章◎大東流一ヶ条

第3章◎合気補完術・骨相学

第4章◎脳科学と意識

第5章◎物理学と発想力

第6章◎コヨリの合気

第7章◎体の術理と愛の原理

終 章◎対談「佐川宗範の教えと我が“合気”探求」

◎塩坂洋一 Shiosaka Youichi

1959年生まれ。1977年、松武館(早島正雄主宰)入門。1981年、佐川道場入門。現在は、松武館伝大東流合気術を中核とした合気之術を指導。合気之体作りを為す為に必要な練丹練功・錦身修法等の技術を通じた殺活一如、合気之術の実践的エッセンスを体系化し、個人教授している。指導・監修した DVD『合気之体法 全2巻』(弊社刊)がある。

◎保江邦夫 Yasue Kunio

1951年生まれ。ノートルダム清心女子大学大学院人間複合科学専攻教授。確率変分学の開拓者。“武の神人”佐川幸義宗範より直伝を受けた大東流合気柔術の真理を探究している。著書に『武道 vs 物理学』(講談社)、『身体「崩し」の構造』(弊社刊)、DVDに『保江教授の合気テクニカル 全2巻』(弊社刊)など。

■塩坂洋一・保江邦夫 共著 ■A5判(並製)

■276頁(予定) ■予価:1,680円(本体1,600円+税)

※購入方法:巻末の注文ハガキ、郵便振替用紙をご利用下さい。また、現金書留、電話注文(代引き手数料250円)で承っております。送料は1枚500円、2枚以上700円です。全国の書店で買い求められます。

BABジャパン

〒151-0073東京都渋谷区笹塚1-30-11 中村ビル
TEL.03-3469-0135 FAX.03-3469-0162

全国どこでも送料無料配送します!!

HP・スマートフォンからも注文可能です!

<http://babjapan.tp.shopserve.jp/>



松尾牧則

MATSUO Makinori

1962年、山口県生まれ。筑波大学大学院修士課程修了。日本武道学会所属。専門分野は武道論、弓道(弓道史・弓道論・射術・弓具・故実・指導法)。著書に『もっとうまくなる!弓道』(ナツメ社)、『日本武道学研究』(共著、島津書房)、『武道傳書集成第1~8集』(共著、筑波大学武道文化研究会)など、多数。大学1年次に全日本学生弓道選手権大会で団体優勝、明治神宮奉納全国弓道大会で個人優勝2回。弓道錬士六段。現在、国際武道大学体育学部准教授(武道学科副学科長)。同大学弓道部監督。そのほか、ドイツ、オーストリア、ハンガリーなどで弓道セミナー講師を務める。『月刊武道』(日本武道館)にて「弓道 その歴史と技法」連載中。

見送られるのですか。
宮田 当時、和弓・アーチェリーに拘わらず日本で弓をやる団体では全弓連がいちばん大きくて、その上、エントリ権(FITA加盟権)を全弓連が持っていたので、オリンピックや世界大会等へ正式に選手を派遣するには、すべて全弓連を通さなければいけなかったんです。

松尾 当時は全弓連とは別に、日本アーチェリー協会(1966年には全日本アーチェリー連盟が結成され、現在に至る)があったんですよね。細井 1947年に結成された日本洋弓会という団体があつて、日本アーチェリー協会は日本洋弓会が1956年に改称したものです。一方で全弓連も内部に洋弓部を作り、1958年に

FITAに加盟したという経緯がありますね。
松尾 第24回世界弓術選手権大会がオランダのアムステルダムで行われたときも、日本選手団を送ったのは全弓連ですね。
細井 そうです。私はその日本選手団の監督を務めたんですが、そのときに全弓連から和弓選手の参加を打診されています。しかし私は「和弓の選手がアーチェリーの試合に出ることは日本弓道の尊厳を損なうのではないですか。アーチェリーはアーチェリー、和弓は和弓でやったほうがいいと思います」と、全弓連に申し上げたんです。何しろ道具も違うしルールも違う。私としては賛成できなかったんです。でもせめてひとりだけでも連れて行ってくれといわれたので、宮田先生に参加していただくことにしたわけです。
松尾 東京オリンピックにも全弓連が主体となつて、和弓の選手で出場するつもりだった。それが「オリンピック

対策五カ年計画」ですね。結局、東京オリンピックでは、参加国の不足によりアーチェリーの正式種目化は見送られたんですが。
宮田 そうですね。全弓連はアーチェリーではなく、あくまでも和弓で出るという計画を立てたわけですよ。それで弓具の研究をやったり、後樂園で和

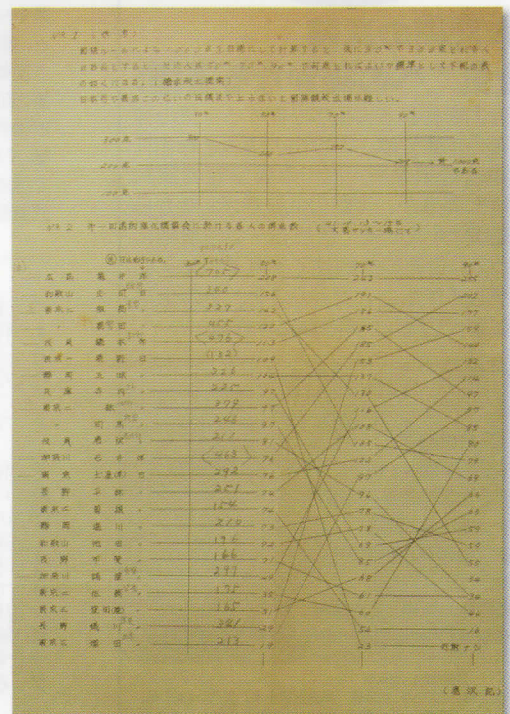


入場する日本選手団。向かって左端、細井氏。左から二人目に団長の渡辺男二郎氏。その後方に続くのが宮田氏。

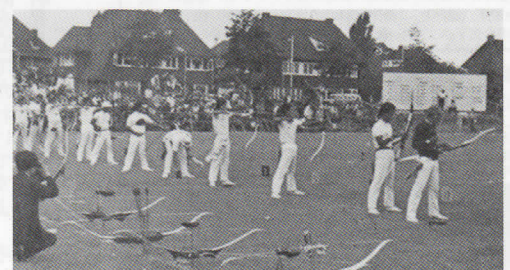
オリンピック対策五ヶ年計画 会 号 通 2.2 1980

順 号	内 容	備 考
1	オリンピック委員会対策委員会の設置	本協会に委員会を設ける。定期的に委員を各機関、各団体から選出する。
2	派遣委員会設置の促進	オリンピック対策の推進
3	国際連盟、国際オリンピック委員会との関係の強化	和弓の国際化、国際オリンピック委員会に和弓を登録させる。
4	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
5	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
6	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
7	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
8	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
9	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
10	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
11	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
12	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
13	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
14	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
15	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
16	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
17	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
18	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
19	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
20	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。
21	和弓の普及（新設・活用）	和弓の普及に努める。和弓の普及に努める。

当時、全弓連がたてた「オリンピック対策五ヶ年計画」の表。



世界選手権参加の前年に行われた、和・洋弓合同の「第1回選的強化講習会」における成績表。宮田氏は4位だが（上から四人目）、和弓におけるトップとなった。



実際の試合の様様。右から六人目に宮田氏の姿がみえる。現地でも宮田氏は大変注目されたようだ。

弓とアーチェリーの混合大会をやった
りしたんです。

松尾 その大会のルールは、混合ルー
ルを作って行われたんですか。

宮田 いや、アーチェリーのルールで
した。それで私が世界選手権に出場す
ることになったのですが、私は全弓連
からの派遣選手なのに、費用はすべて
自腹でと言われたんですよ。アーチェ
リーの選手は全額出たんですけどね。
当時は1ドルが360円の時代ですよ
（固定為替相場制）。そりゃないよと
（笑）。このままではとても行けないと
いうことで、寄付を募ってなんとか費
用を捻出したんですが、それでも10万
円は自腹になりましたね。

宮田先生は一貫して和弓を続けて
いらしたんですね。そこへアーチェ
リーの大会に出場して欲しいと打診が
あった。なぜ出場に踏み切ったので

か。

宮田 私を世界選手権にまで出場させ
たのは何かというと、とある和弓関係
の方から「これからは洋弓の時代だ。
和弓なんて……」というようなこと
を言われたからです。私は決して国粹
主義者ではないけれど、これにはむっ
としましてね（笑）。それ以来、私は
和弓でやれるところまでやってみたい
と思うようになったし、そのためにい
ろいろな研究をしました。また、当時、
すでに弓師や矢師も少なくなっており、
弓を作る材料のハゼノキ等も少なく
なっていたことから、このままでは和
弓そのものがなくなってしまうという
危機感を募らせていたんです。弓や矢
がなくなったら、いくら弓道が好きで
もできないじゃないですか。

それに武士の時代から連綿と続いて
きた弓道の術も、弓道が持つ倫理性も

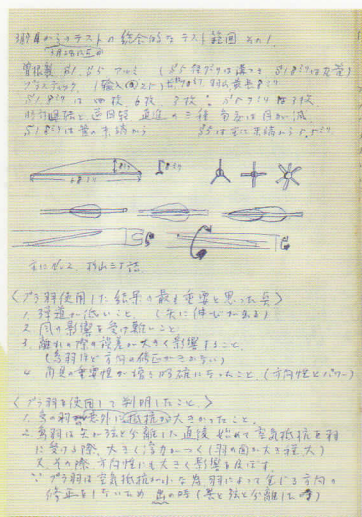
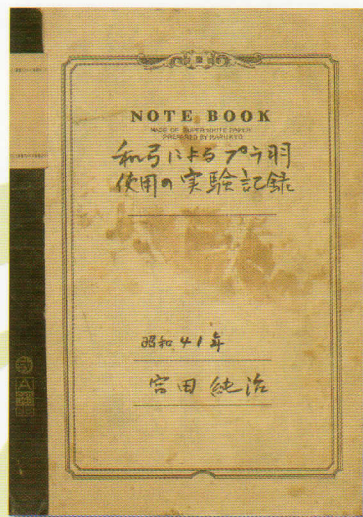
伝わらなくなってしまう。伝統を
後の人に残すには道具がなければダメ
ですからね。道具を作っていく必要性
を感じて、その研究のためにも世界選
手権に行ってみようということになっ
たんです。

細井 私もその考えには賛成です。た
だ和弓の道具も変わってきたね。アル
ミニウム製のシャフトやグラスファ
イバー製の弓でしょう。古来の材料
がなく、作る人も少なくなっているか
ら、そういう形になってしまおうと思
うんですけども。和弓はアーチェリー
と違って標準も付けないし、決まった
距離的に当てることだけに集中した
技術を伝統的に持っているわけではな
い。それを伝えていかないとダメな
んよ。武道としての弓道は日本の伝
統文化ですからね。

松尾 そのとおりだと思います。

アーチェリーと弓道の違い

細井 アーチェリーはとにかく的に当
てればいいという考え方で、そのため
にどんな道具を改良していったわけ
です。それまでになかったものを付け
加える形で発展し、的中率を上げてい
きましたよね。私たちが世界大会に
行ったときに、ある選手が弓の先にゴ
ムをつけていて、矢を番えて弦を引っ
張っていくところ、つまりは現在
のクリッカー（矢を一定の長さまで引
き絞るための金属片）の原型になるよ
うなものを使っていた。今ではポ
ピュラーとなったクリッカーは、弓道
でいうところの伸び合いを強制的に作
る道具です。この伸び合いは、弓のい
ちばん大切な、技術の根本なんです。
アーチェリーではクリッカーが発明さ



大会は30m、50m、70m、90mの各距離を射った総合点で競われた。世界大会参加に向けて、弓はもちろん、プラスチックによる矢羽の使用について詳細な実験を独自に繰り返した宮田氏。それは、単に試合に勝つためではなく、来るべき時代に対して、「和弓の伝統をいかに遺し、伝え続けていけるか」への挑戦だった。



世界大会参加の模様や、現状に甘んじることなく、弓具と射法の徹底的な研究が急務であることを説いた、宮田氏の報告書が掲載された全弓連機関誌「弓道」。



参加した日本選手は7名。宮田氏以外はすべてアーチェリー選手だが、日本の初参加としてはまずまずの成績を収めた。



同大会を制したアメリカのレイ・ロジャース選手。当時、クリッカーがようやく浸透した時期で、ロジャースはノークリッカーの最後の王者となった。命中精度を上げるための道具の開発がアーチェリーの歴史を刻んでいる。

れたことで全体的に点数が100点は伸びましたね。

このようにアーチェリーは道具で技術をカバーしていくけれど、和弓はまったくそれがなくて、ただひたすら修行、練習を積み重ねて高みを目指すという違いがあるんです。

松尾 クリッカーができたことによって、矢をあるところまで引つ張るとカチツと音が鳴り、その音が鳴ったところが和弓でいう矢頃（やごころ）ですね。だから、そこで発射をすれば一定した矢飛びが得られ、命中率が上がる。ところが和弓の場合はクリッカーがないので、それを自分の身体で感じ取りながら矢頃を体得していかなければならないということですね。

細井 そうです。このような道具の違いが、的中率の決定的な差につながります。

宮田 実はこの大会から10年くらい経ってから気づいたことがあります。それは、アーチェリーはアウトドア用であり、対して和弓は江戸期の通し矢以降、インドア用として発達した道具だということです。射術も同様です。たとえば堅帽子の弾（はじ）というのは数を引くための道具であって、的中にはまことに不都合なものなんです。しかも雨が降ったら出来ないでしょう。現在の和弓は通し矢以後に堅帽子を主にして発達してきたもの。このようにアーチェリーと和弓は想定される使用状況からしてまったく違うんですよ。

様々な工夫と挑戦

松尾 この時の世界大会に出場された際のエピソードなどがありましたらお聞かせください。

細井 日本選手の成績で最も良かったのは団体の7位ですか。個人でも、シングルラウンド90メートルの時点では2位ぐらいになった選手がいたんですよ。残念ながら日本人選手はスタミナがなくて落ちてしまいましたけれど（個人総合では末田実氏の24位が最高位）。団体7位というのは相当に良い成績だったと思いますよ。

松尾 そうですね。上位に食い込むにはもう少し時間がかかると思っていた中で7位ですからね。周囲からも高く評価されたようです。

——それは、和弓の伝統が良い影響を与えたからと考えられるのでしょうか。松尾 その頃の日本のアーチェリーの技術なり精神、考え方の中に、和弓の在り方があったということです。

細井 もちろん日本のアーチェリーの技術には、和弓の基本というのが全部入っています。

松尾 宮田先生は、大会に出場するに当たって、和弓にさまざまな工夫をされて挑まれたそうですね。

宮田 まず和弓の表と裏の竹を剥がして、そこにグラスファイバーを貼り付けたんです。その頃の日本で手に入られるグラスファイバーは工業用しかなくて、しかも何の反発力も有していないものでしたから、やむを得ずアメ

リカから材料を輸入して作りました。
松尾 接着剤はどうしたんですか。

宮田 接着剤もいろいろ試して、最終的にエポキシ系接着剤に行き着いたんです。日本の今の竹弓は尿素系接着剤を使用することが多いようですが、これは劣化が早いんですよ。

細井 矢もアルミシャフトを使つたでしょう。

松尾 アルミ製の矢に、羽は何を使わせたんですか。

宮田 羽にはプラスチックを使いました。ただ下敷きみたいな堅い材質のプラスチックでね、最初に使うときは、顔を切るんじゃないかと思いましたよ。

松尾 そして和弓に照準器Ⅱサイトを装着されたんですね。どのようなメリットがあつたんでしょうか。

宮田 やはり狙いを一定にさせるという点ではそれなりに役に立ったんじゃないかと思えますよ。

松尾 いろいろな距離がアーチェリーにはありますが、その距離に応じてサイトを調整して使つたわけですね。蹠はなにを使つたんでしょう。

宮田 三ツガケの柔帽子を使いました。世界選手権で宮田先生が和弓に施した数々の工夫の中で、最も役に立ったのはなんだったのでしょうか。

宮田 やはり竹の弓、竹の矢のままで出場していたら、おそらくあれだけの成績を上げることができなかったでしょうね。

——アーチェリーに対抗するために、変えた技術というのはあつたのでしょうか。

宮田 それはまつたくないですね。

松尾 世界選手権に出場されたのは宮田先生だけでしたが、そのほかにも和弓を持つて世界と戦おうと考えていた方はいらつしやつたんですか。

宮田 当時は何人かいましたよ。中に



昔日を語りながら、それぞれが歩んできた中で醸成していった弓道論をかわす細井氏と宮田氏。

はアーチェリーに転向した人もいます。
松尾 宮田先生は、現在ミヤタ総業株式会社という和弓メーカーの代表取締役でいらつしやいますが、会社を作られたのは、この世界選手権に出場されたことが関係しているんでしょうか。

宮田 後世のために新しく工夫した弓具を作らなければいけないからね。そのために研究していたわけだから。

松尾 グラスファイバーを和弓の材料として使つたのは宮田先生がパイオニアですね。

宮田 まあ、そうですね。竹はどうしたって天候や気温に影響されますからね。炎天下に和弓を1時間も置いておけば形が崩れてしまいますし、当然矢も曲がります。雨が降れば、あんな大きな羽ですから濡れてペタンとなって方向性がつかなくなつてしまいます。世界大会での工夫は、そういった和弓の不利なところをカバーするためだつ

たんです。

松尾 当時、全弓連は本気で、和弓で世界と戦おうと思つていたんですよ。しかし、結局は1968年に全日本アーチェリー連盟にFITA加盟権を譲渡して、アーチェリーから手を引くことになりました。

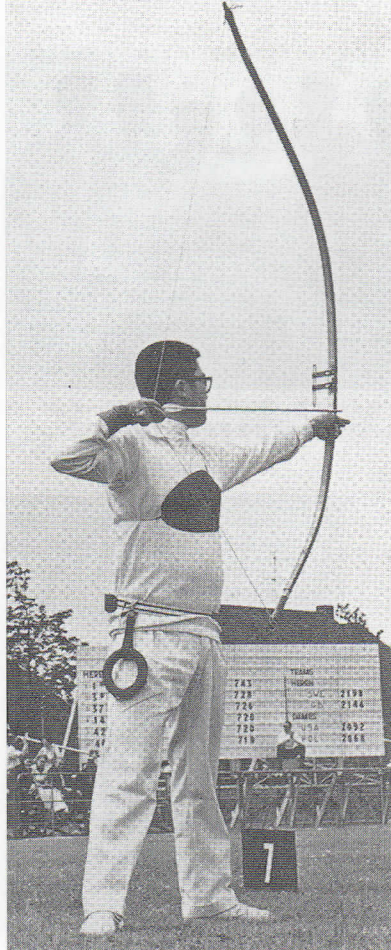
細井 やはりあの世界選手権での結果がすべてですよ。日本でいちばん和弓で当たる人を連れて行つたのに及ばなかつた。全弓連は、そこで初めて和弓とアーチェリーは異質なものであることを悟つたんじゃないですか。

宮田 結果はわかりきつたことでしたけれどね。その意味では私はスケープゴートの役割を担つた部分もあるのです。

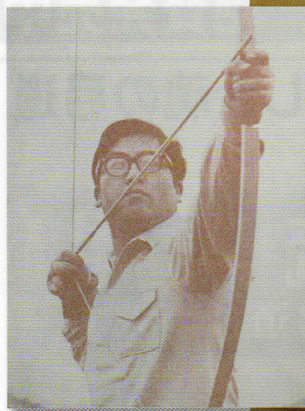
松尾 宮田先生ご自身がわかつていらつしやつたということですか。それは選手権に行く前からですか。

宮田 わかりきつていましたよ、自分の成績を見たつてね。あの当時いわれたのが、とにかく30メートルで300点を出せるか、と。和弓で300点はなかなか出ないですよ。でもアーチェリーでは最低の点なんです。

——アーチェリー用に作られたルールで行われた大会に、あえて目的も使用状況も違う和弓で挑戦したこと、その後の日本弓道に新たな方向性を見出させた、そんな役割を果たしたのが第24回世界弓術選手権大会への和弓出場の意義となつたわけですね。本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。



手製のサイトを取り付けた弓で試合に臨む宮田氏。サイトに関しては、あまり際立った違いを見せず、大会途中ではずしてしまつたとも。一方で、腰には和弓の弦巻（予備の弦を入れる道具）がみえる。



特集第四章 宮田純治

和弓の伝統を伝えるために……

弓道新時代への挑戦

1967年の第24回世界弓術選手権大会に和弓をもって挑んだ宮田純治氏。

その挑戦には、どんな意味があったのか？

第四章では、現在、「グラスファイバー日本弓」という

グラスファイバー製の弓を中心に製作、販売をされている、

宮田純治氏の工房を改めて訪れてみた。

資料協力◎宮田純治、その他 取材・文◎野村暁彦

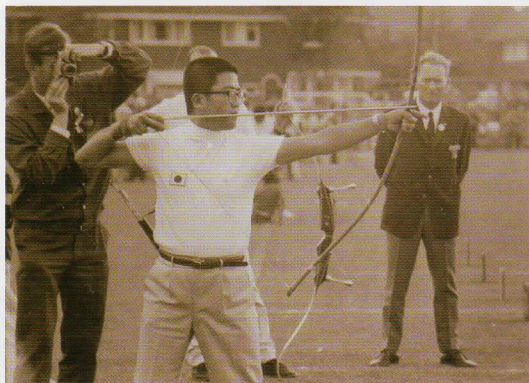
アメルスフォールトの屈辱

昭和42年（1967）、オランダのアメルスフォールトで開催された第24回アーチェリー世界選手権大会に、日本から7名の選手がエントリーした。彼らは何れも全日本弓道連盟に登録された選手だったが、このうち6名はアーチェリーの選手、そしてただ一人、宮田純治氏だけは、和弓でのエントリーだった。

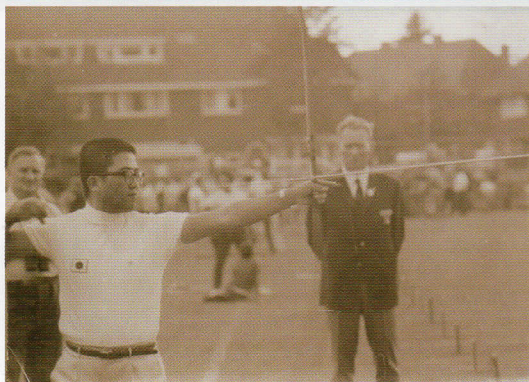
当時の全日本弓道連盟は、昭和33年（1958）にはFITA（国際アーチェリー連盟）に加盟し、和弓のみならず、日本におけるアーチェリーも統括する立場にあった。全日本弓道連盟としては、もつと多くの選手を和弓で

エントリーさせたかったようだが、最終的には宮田氏一人が和弓で試合に臨むことになったという。しかし、試合の結果は男子個人129名中129位という残念な成績に終わってしまった。結果だけを見ると、あたかもアーチェリーが和弓よりも優っているという印象を受けるが、この大会によって見えてきたのは、単純な優劣ではなく、和弓とアーチェリーの違いだったようである。

弓に弦を張って矢を番え、引き絞った弓の反発力によって弦で矢を押して飛ばすという基本的な構造は、和弓もアーチェリーも同じである。また、弓はもともと狩猟に用いられていた道具が対人兵器として戦争に投入され



同じく公開練習において、現地のテレビ取材を受けながら弓を射る宮田氏。多くのカメラマンも宮田氏の射術へカメラを向ける。



前日に現地で行われた練習にて、アーチェリーに混じって和弓を射る宮田氏。ここや、他の公開練習時でも手製のサイトは弓からはずしている。アーチェリーに比べて一回り大きな和弓が壮观だ。



フィールドにおける公開練習にて。現在のクイバー（アーチェリーの矢を携える道具）など持っていない宮田氏は、手製のバンドに矢を番えて大会に臨んだ。



世界大会出場に向けて、研究を重ねたジュラルミン矢と竹矢の数々。中央の羽の小さいものが90メートル用のもの。上の方の矢に取り付けられたプラ羽はフレッチャーという器具で宮田氏自ら装着した手製のもの（左写真）。風の抵抗の具合、角度など詳細に試行を重ねた（第三章参照）。



大会当時のアーチェリー。当時は写真のワンピースボウ（一体型）が主流であった。性能も現在ほどの精巧さには未だ至らないものの、命中精度に特化した発展を続けていた。

日本弓道を決定づけた堂射

競技としてのアーチェリーは、現在と同様、基本的には如何に正確に的中させるかを競い合うものとして発達してきた。これに対して日本弓道の競技化は、京都の三十三間堂の、西の軒下を南から北へ約121メートルの距離を射通す「堂射」に始まっている。

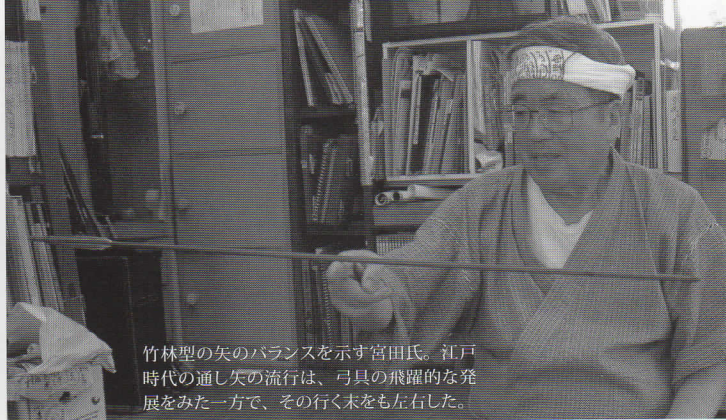
堂射は慶長11年（1606）、竹林坊如成の門人であり、松平下野守殿衆の浅岡平兵衛直政が51筋の矢を通して、天下一であるという証拠を見せるために額を上げたことに端を発すると言われているが、これを見た武士たちが次々と挑戦して記録を塗り替え、貞享3年（1686）に紀州藩士和佐大八

るようになり、やがて主力兵器となっていたとされている歴史的沿線にも、それほど違いはない。しかしながら、環境の違いや考え方の違いによって、弓具の素材や射法は異なったものになる。

日本の弓術は1600年代初頭から主な活躍の場を戦場から競技の世界に移していき、アーチェリーもまた17世紀にイギリス国王ヘンリー8世が催した御前試合が、正式な競技化の始まりとされている。双方は、ほぼ同時期に武術から競技へと移行していったのであるが、それぞれの競技の形態が、後の日本弓道とアーチェリーに大きな影響を与え、似て非なるものへと進化していくことになる。



大東文化大学に入学後、脂の乗りきった頃の宮田氏の稽古風景。大学4年次に第24回世界弓術選手権大会への出場が決まった。



竹林型の矢のバランスを示す宮田氏。江戸時代の通し矢の流行は、弓具の飛躍的な発展をみた一方で、その行く末をも左右した。

イギリス伝統のロングボウとその矢。アーチェリーの原型となった弓の一つだが、その伝統は……。

宮田氏が行った独自の弓具研究をまとめた『遠的における和弓弓具研究の一端として』。世界大会出場をにらんで、弓、矢、弾、弦、狙い（サイト）の各項目で詳細に実験結果と意見を述べている。例えば弾の補として「雨天の影響としては、現在の弾（鹿皮製）では競技に絶対損のようです。理由として、小雨でしかも短時間の降雨は差し支えありませんが、国際ルールによる競技会のように4日間に渉場合、雨量も多く、時間的にも継続する事態も予測しなければならぬと考えます。鹿皮製では欠点として……」といったように、いかに安定した射を維持しうる弓具が理想か考察されている。

遠的における和弓弓具
研究の一端として

宮田 重雄

昭和41年10月1日

の13053射中8133筋を通したのが、最終記録となっている。藩の威信をかけて行われる堂射は、一度行うのに千両にも及ぶ莫大な経費がかかり、大藩はともかく小藩がこれを行うと藩の財政が傾いてしまうため禁止されてしまうが、浅岡平兵衛から和佐大八までの80年の間に、堂射にも「大矢数」「日数矢」「千射」「百射」などのルールが制定され、弓具、射法とも徹底的に研究と開発が重ねられていった。

堂射はただ飛距離を伸ばせばよいというものではない。約5メートルの高さの底の下で弓を引くため、仰角が取れないのである。つまり、高さ5メートル、距離121メートルを射通すという非常に限定された条件をクリアすることのみを目的として、心血を注いで研究開発されてきたのが、この時代の弓具であり、射法なのである。

宮田氏が所蔵する堂射用の弓を見せたいのだが、並寸の7尺3寸よりも3寸短い7尺の弓だが、握りの下を3寸短く詰めたもので、このようにして矢が上飛びせずに低い弾道で飛ぶように工夫されているという。矢も戦闘用の頑丈なものから軽くてよく飛ぶものへと変わり、篋（矢のシャフト部分）の真ん中あたりが太くなった「麦粒型」や、真ん中より後方に位置する「袖摺りの節」の部分が太くなった「竹林型」などの矢が考案された。

また、現在でも用いられている堅帽子の弾も本来は堂射のために考案され

たもので、この時期に開発された弓具は、現在の弓具の礎となっている。

衰退する伝統弓矢の現実

堂射が禁止されてからも各藩に弓組は存在し、有事に備えていた。主に堂射によって発達した弓具を使って稽古していたが、その中で江戸の武士たちが目標としたのは、矢が飛ぶ速度、貫通力、正確な中の三つを兼ね備えることだった。これに対してアーチェリーは、ひたすら的中精度の向上のみを目的とする。ここに技術的な、大きな違いがあるのではないかというのが、宮田氏の考えである。

それでも、アーチェリーが現在のよう精巧な弓具を用いるようになる以前は、的前でも日本の弓具や射法の方が優れていたようで、昭和12年に行われた日米交歓試合では、総合点で日本がアメリカに勝利している。しかしイギリスでは、簡素な丸木弓から鋼鉄製のスチール・ボウが開発され、さらにアメリカで行われるようになってからはグラスファイバーやカーボンファイバーといった新素材による弓が開発され、その構造も一体型のワンピースボウからリム（弓の弾性部分）とハンドという2種類のパーツから成るティクダウンボウへと進化し、さらにサイト（照準器）やスタビライザー（安定器）を始めとする様々なパーツを装着して、命中精度を上げる工夫が為されてきた。

昭和42年、世界弓術選手権大会の後、



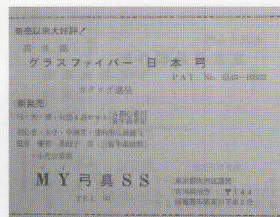
宮田氏が手本としているという、漆塗りの見事な和弓。日本弓道における新素材の弓具とは「いかに竹材のそれに近づけるか」という発展を日夜続けている。その上で、「いかに安価で、恒久的な性能を維持し続けることができるか」が、今後の弓道界をも左右すると、宮田氏は考えている。



我が国のアーチェリー黎明期にその普及を推進した小沼英治氏（向かって左から三人目）と菅重義氏（手前、弓を引いている人物）。菅氏の手には前頁のロングボウと思われる（資料提供／細井英彦）。戦前においては、竹と木を合わせた合板製の日本の弓は、海外には無い精密な器具だった。



第1回遠的強化講習会の模様。宮田氏のほか、何人かの和弓選手が世界を目指して技を競った。



現在のミヤタ総業(株)の前身として、共同経営者と頭文字を合わせた「MY弓具」の名で載せた、グラスファイバー弓の広告(「弓道」昭和47年9月号)。



現地のテレビ放送で紹介された宮田氏の映像。オランダの放送局を通じて欧州の広範囲で放映されたという。こうした場で伝統の技術に集まる注目度は、どこも変わらない。

次代を担う新しい弓具への挑戦

しかし、同じ新素材を導入するにしても、アーチェリーのように、より高性能の弓を作ることが目的でなく、その主な眼目は日本弓道の存続と普及なのだという。

宮田氏はこの大会に関する報告書の中で、これからの時代は、和弓もグラスファイバーの弓やアルミ合金の矢、プラスチックの矢羽などの導入を提案し、さらに特定の弓師に弟子入りするわけでもなく、独自に新素材の弓具の製作に取り組み始める。

大会に出場した際、宮田氏はイギリスの伝統的な弓術であるロングボウを実践しているグランドナショナルアーチェリーソサエティーのシニアコーチであるD・ゴールド氏を訪れている。「私がなぜイギリスへ行ったかという、イギリスにはロングボウという伝統的な弓がある。日本にも弓道という伝統的な弓がある。これらがどう残っていくのかという、その将来を見たいと思つて行つたのですが、イギリスでは、伝統的なロングボウはほとんど消えかかっていました。今も残っているのかどうか分かりませんが。だから日本だつて、その轍を踏まないとも限り

ませんから、そういうことも知りたくて行つたわけです」

宮田氏はこう語る。この当時、ソサエティーで用いられている弓はいずれも100年以上前に作られたもので、すでに職人がいないため新たな弓を作ることが出来ない状態だったという。

日本の弓具もまた、その製作には職人の熟練の技が必要とされる。昔ながらの竹や木などの天然素材は、確かに優れた弓具には欠かせない材料ではあるが、同時に品質が不安定で、これらを使いこなすには長年の修業を要するのである。しかしながら、現在の日本は必ずしも優れた職人が育つ環境では

ない。宮田氏の語るところでは、特に竹矢を作る矢師は、現在では全国に4人しかいないという。そこで、優れた弓具を手本に、新素材によつて安価で高品質の弓具を安定供給しようと考えたのである。

弓道の良質な技は、良質な弓具によつて育てられる。アーチェリーの場合、弓具そのものの性能を進化させ、それをいかに使いこなすかというところで技術を磨いていくが、これに對して日本の弓道は、高性能でありながらも制御が難しい弓具を使つて心身を練磨し、「的中を求めつつも、中ればよい」というものではないという。一種独特の価値観のもとに成り立っている。特に弓道の場合、武道でありながら相手がいないため、その評価は相手との絶対評価ではなく、全ての結果が自身に跳ね返ってくる絶対評価である。それだけに、ある意味最も自分に厳しい武道であると言えるだろう。

この東洋的な思想を根底に持つ日本の弓術を、老若男女を問わず、より多くの人々に知ってもらうためにも、限りなく伝統的な弓具に近い品質を持つ新素材の弓具の使用は、日本弓道なりの進化の方向性なのだ、宮田氏は確信したようだ。

現在、多くの学生達が弓道に親しんでいるが、そのほとんどは新素材による新しい弓矢を使用している。この底辺の拡がりの中から、新時代の日本弓道が育まれていく。

月刊秘伝

下記以外に若干数在庫がございます。数に限りがありますので、ご注文の際には在庫をご確認の上、お申し込み下さい。

バックナンバー（に限り）1度に3冊以上直接当社にご注文の場合、送料代引手数料をサービス（無料）いたします！

2011年

3月号 心身の可能性を拡張、コントロールし尽くす！ 秘伝的ヨーガのススメ



定価 990 円
(本体 943 円)

「中達也師範に聞く、鉄騎が示す型の真実」「新連載開始 塩坂洋一×保江邦夫「合気探求 書簡問答」」「根本一老（伝説）螳螂拳の近接攻防」「知られざる武道家 椎木敬文と香取神刀流」他

5月号 筋電測定でわかる、武術の驚異のメカニズム 達人を測定する！



定価 990 円
(本体 943 円)

「インドネシア武術“チンクリックグリーン派シラット”登場」「趙玉祥 山西派車派形意拳」「沖縄小林流空手 横山和正」「養神館合気道 塩田泰久インタビュー」他

6月号 中国四千年の人間探求 その叡智に学ぶ人体活性 中国式強健功法の秘訣



定価 990 円
(本体 943 円)

「緊急特集 危機に生きる武道と身体」「幻の天然理心流棍法を訪ねて」「合気探求 書簡問答」「武術極意の深あへい話」「八光流柔術心的作用に迫る」「藤本靖 動きのホームポジション」他

7月号 人が備えた、最小かつ最高の武技 “突き”の極み



定価 990 円
(本体 943 円)

「柳沢流護身術 短棒術指南」「対談 金井省着×友永淳子 ～整体とヨーガを結ぶ心身一元論」「JP バランス療法」「第10回渋谷区民太極拳大会」「新ボディワーク 武道家必見！」「PNF」とは何か!?」他

8月号 日常のあらゆる危険から身を守る術はここにある！ 高岡秀夫の護身学



定価 990 円
(本体 943 円)

「イスラエル伝統格闘術 KAPAP」「古式腹引き『平成の奥義書』作成の試み」「岩間神合気修練会」「八光流柔術 山崎見峰」「真北斐図 太極拳に秘められた「起承転結」の呼吸法」「第49回 全日本合気道演武大会」他

9月号 武道に子供用も大人用もない。 武道教育とは何か？



定価 990 円
(本体 943 円)

「レポート欧州日本武術事情」「武田惣角の“空白の修業時代”」「流水メソッド入門 最終回」「“仕留める”ヌンチャクの技」「八光流柔術 “心的作用”の謎に迫る 最終回」「武術とフェルデンクライス」他

10月号 達人を作ってきた「一人稽古」の秘訣とは？ “自主鍛錬”で強くなる！



「対談 平直行×成瀬雅春」「構造動作トレーニング」「無想剣の探求に心惹かれた修行者たち」「アレクサンダー・テクニクの活用」「バランスチェック・ヨーガのススメ」「秘伝 生命栄養学」他

11月号 内部へ浸透させる秘密は接近打法にあった！ “貫通力”で倒す！



定価 990 円
(本体 943 円)

「新シリーズ 表現の達人の“身体メソッド”-第1回トランペット奏者の野口体操」「システム セミナリポート」「双水執流 光尊会創立60周年」「張紹成 京劇・武術・易学の集大成」他

12月号 嘉納治五郎が夢見た“完全なる武道体系” 型に秘められた実戦柔道



定価 990 円
(本体 943 円)

「欧州日本武術事情 オランダ柔術編」「新垣清尾 沖縄空手セミナー」「短期集中シリーズ 剣術左足構えと歩み足の有効性 足田 新陰流」「ヴァイオリニスト 五嶋龍インタビュー」他

2012年

2月号 今、合気はここまで分かっている！ 合気探求最前線！



「戦うことができる太極拳の理合」「ロシアン武術 システム 東京&トロント W セミナー & インタビュー」「八卦掌精華」「八王子に遺るもう一つの天然理心流棒術」「フェルデンクライス・メソッド」他

3月号 部分に囚われるな！ 全体を同時に観よう！ 観の目で行こう！



定価 990 円
(本体 943 円)

「成瀬雅春対談シリーズ ゲスト：フランソワ・デスト 島の秘太極の覇者 ミット・エイラの矜持」「バグワットと伝説の柔道家たち2」他

4月号 幻の流派の復興と再生 古流武術・再発見！



定価 990 円
(本体 943 円)

「シリーズ宗道臣という流儀」「中国伝統武術 太極拳の復興と再生」「秘伝生命栄養学」他

5月号 ボディワークで武術の脱力を解く “脱力”とは何か？



定価 990 円
(本体 943 円)

「當田流剣術の小太刀操法」「ボクシングに学ぶ脱力」他

6月号 今、起こり得る危機とは？「秘伝」しか導き出せない回答とは？ 現代日本護身超入門



「倉部誠 原理で学ぶ合気術」「日本泳法 向井流水法の修練」「システム・セミナー レポート 近接戦闘の秘訣」「第二回 撃剣大会」「七帝柔道記」番外編 増田俊也×電澤宏昌 特別対談」他

7月号 高岡秀夫先生 全身くまなく解さばくす完全解法メソッド “ゆる”とは何か？



定価 990 円
(本体 943 円)

「少林寺拳法 “京都別院”の追憶」「成瀬雅春対談シリーズ 成瀬雅春×武田邦彦（科学者）」「八極宗家・呉氏秘伝 制敵不殺の八回頭棍」「開祖の横顔 坪井香謙師範」「増田俊也 七帝柔道記」他

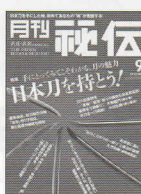
8月号 “高専柔道”で頂点に達した、もう一つの日本武道 “寝技”という完全決着。



定価 990 円
(本体 943 円)

「中島章夫 武術の稽古素材」「新連載 作家・多田容子 武術に学ぶ会話術」「大東流無傳塾 飯田宏雄 触れ即合気への只管開手」「新正体法の基本」「心体育道 護身としての“表の捌き”“裏の捌き”」他

9月号 手にとってみてこそわかる、刀の魅力 日本刀を持とう！



定価 990 円
(本体 943 円)

「巨星、逝く 湯浅強老師が示した太極拳原点 帰郷の道」「新連載開始！ 平直行の現代武陵桃源記」「富田高久（肥田氏強健術）×長沼啓憲（秘伝生命栄養学×腸脳力）特別対談」「伝説岩間流第5回合気道演武大会」他

10月号 だから人間は、強くなれる！ 呼吸 氣 生命力



「少林寺拳法 匠法・整法の実技」「八光流柔術最古参！ 寺澤文山」「松田隆智 八極拳奥義・六大開拳の謎」「システム・セミナー プレザン・ゼットラ」「平直行の現代武陵桃源記」「合気之練体の階梯」「武女子見参」他

全国どこでも送料無料で配達いたします!! スマートフォンからも注文可能です!

購入方法

- HP・スマートフォンで <http://babjapan.tp.shopserve.jp/>
- お手軽なお電話で TEL.03-3469-013 5
- FAXで FAX.03-3469-016 2
- 本誌の専用注文ハガキ、郵便振替用紙にて

クレジットカード、銀行振込、郵便振替、現金書留、そしてHPではコンビニ決済もご利用いただけます（先払い）。代引きの場合のみ、送料、手数料がかかります。また、弊社の商品はすべて全国の書店でもお取り寄せいただけます。

(株)BABジャパン 〒151-0073 東京都渋谷区笹塚1-30-11 中村 ビル

月刊 秘伝

11月14日発売!

特集

すべての動きの質を変える、魔法の筋肉
背中を使え!

◎達人たちの背中を筋電測定、ロシアアン線線具ケトルベルで背中を鍛える 松下タイケイ etc.

<次号予告>

2012年
12月号

香取神道流・杉野道場創立85周年記念企画

昭和から平成へ 杉野道場85年の歩み

2年に一度の合気道最大の祭典

世界の合気道人が集う、第11回国際合気道大会

少林寺拳法本部の“山門”に住込み修行!

少林寺拳法“山門衆”三世代鼎談

“意”を練る、閃撃の拳法

中国・意拳 姚宗勛の系譜

合気探求と大東流技法

保江邦夫「合気を悟るために」

好評第二回・長沼敬憲「現代兵糧食のススメ」

海外渡航時の刀剣取り扱いの問題点

好評隔月連載・藤本靖「動きのホームポジション」

※掲載内容は事情により変更となる場合があります

月刊 秘伝

武道・武術・秘伝に
THE HIDDEN
BUDO & BUJUTSU

2012年11月号・第299号
平成24年10月14日発行
定価990円(本体943円)

編集・発行人
東口敏郎

編集顧問
島津兼治

副編集長
塩澤有矢

編集部
原田伸幸
近藤友晴
森口敦
小川敬司

映像事業部
山下卓
永野雄城

印刷
図書印刷(株)

デザイン
ギール・プロ、
沢川美代子、和泉仁、サン新宿、
石川志摩子、リクリ・デザインワークス

発行
(株)BAB ジャパン出版局
〒151-0073
東京都渋谷区笹塚1-30-11 中村ビル
TEL 03-3469-0135 (代表)
03-3469-0190 (編集部)
FAX 03-3469-0162
http://www.bab.co.jp/hiden/

この記事は「月刊秘伝」(BAB ジャパン)さんのご好意により、許諾をいただいたうえで、「アーチェリーどっとコム」が提供しています。記事の無断での転載はお断りします。ご了承ください。

編集後記

◆前回の弓道特集に続き、今号の特集でも取材させて頂いた啓進会の皆様。何と中学時代から「秘伝」を愛読していただいているとのこと。何たる「ヒデニスト」(←私が勝手に称しています、ご容赦下さい)。前回の弓道特集で自分の姿が誌面に掲載されているのを目にした時は、もの凄く興奮されたとのことでした。私も自分が憧れの雑誌に掲載されるところを想像してみたところ……堪りません。憧れのあの人もあの技もあの世界も、確かに自分と同じこの世界に在ることを、啓進会の皆様から教えて頂きました。(小)

◆最近アマチュアボクシングが気に入り、ルールを眺めて気付いたのは、面白いくらいに徒手武術と正反対となる文言。「ナックルパート以外の攻撃は無効」⇔「裏拳、拳銃、掌底、貫手」、「頭や肩、前腕、肘を突き当てたり、蹴ると反則」⇔「頭突き、体当たり、腕刀、猿臂、蹴り技」、「ロープを利用して加撃すると反則」⇔「場の状況を利用する」等。とはいえ、一流ボクサーには文句の付けようがない「強さ」の説得力を感じます。(森)

◆毎年恒例の奥多摩湖へ自転車の旅。だいたい片道60kmで、今年のタイムは3時間30分。前回より30分の短縮でした(そして、大自然の中で食べるソバとみそおでんは格別!). 今年に入ってから、ベダリングの技術の向上を実感していただけない、まだまだノビシロが感じられます。自分の体に希望が持てる、ということは他に代え難い喜びがある。武道実践者、治療家の皆さんにも首肯してもらえる共通感覚でしょう。(暁)

◆古流剣術というと、どこか「形だけはどういう残っている」というイメージをお持ちの方は少なくない事だろう。しかし、その本質的な動きとて、確かに現代に生き続けている。それは数は多くないが、今回取材させていただいた春風館、加藤先生のように間近で見せられると、本当にドキッとする。もう二度と見る事はできなそうサムライの動き。それがこうだったんだろうなと思えるものが、まだまだ見られるのだから、この世も捨てたもんじゃない。一方でもうこれは「革命」なんじゃないだろうかというほど革新的な啓進会。こちらにも結局真摯にかつての武術の動きを追及しているグループ。両極のようで、同じなのだ。(原)

◆以前、ある抜刀道の会を取材させていただいた際、見事の手練で巻藁を両断してみせる、ある技を見せていただき、「是非、誌面に御紹介させていただき！」とやや興奮気味に申し入れたところ、その技は外連に過ぎないので紹介できない、と断られたことがありました。その後、改めて据え物斬りがいかに誤解を受けやすいか等、とうとうと論される文章をいただき、自分などには計り知れない想いの重さを感じさせられました。しかし、素晴らしい技を誌面で御紹介できない口惜しさ。その技術がいかに修練の積み重ねで成り立つものなのか、そこに到達し得た想いを共に伝えられるような力量を今後も研鑽していきたいと思います。(有)

「秘伝編集部員を募集いたします!!」

本誌「月刊 秘伝」と関連出版物の企画・編集、セミナー運営、WEB制作、営業・販売などをお手伝いいただけるスタッフを募集しております。職種の経験は不問です。また、将来働きたいとお考えの学生も歓迎します。お問い合わせ下さい。

さらに、フリーランスのライター、カメラマン、デザイナー(DTP・WEB)も募集しております。

お問い合わせはe-mail (tonkou@bab.co.jp) TEL.03-3469-0135でお願いします。

★詳細はWEB <http://www.bab.co.jp/saiyou/edit/>でもご覧になれます。

定期購読のお申込みは!!

「秘伝」は全国の書店でもお求めできますが売り切れ等で手に入らない場合がございます。お客様には確実に購入できますよう定期購読をオススメいたします。

★1年間定期購読料(12冊) 11,880円(送料サービス)

お申込み希望の方は巻末の郵便振込用紙、または定期申込み専用ハガキをご利用の上でお申込み下さい。申込み時に〇年〇月号からの希望と購読開始号を必ず明記して下さい。